

米原歴史文化街道

米原市の歴史・文化財を歩く 119

近江地域の奉納角力

― 後鳥羽上皇伝説① ―

相撲は神事

奴振りとともに、近江地域で伝承されている特徴的な伝統行事が「奉納角力」「角力踊り」です。相撲は秋の行事で、日撫神社（顔戸）と山津照神社（能登瀬）の秋祭に奉納されます。

古代、相撲はその年の後半の農作物の豊凶を占う国家行事として、七



▲ 奉納角力（能登瀬）

月七日に宮中の「相撲節会」として開催されました。後世になると、野神祭など収穫に関する儀礼とセットになり、各地の神社では、天下泰平・子孫繁栄・五穀豊穡・大漁祈願などを願い、神事として相撲がおこなわれ、勝敗によって五穀豊穡を占ったり、最後の取り組みでは力士が四つに組んだ状態で行司が待ったをかけ、「この勝負来年に持ち越し」と述べて、場をおさめることもありまます。一方で、長い年月にさまざまな技が洗練されて、次第に独特の様式を持つ格闘技になりました。日撫神社や山津照神社は、古代の神社一覽である『延喜式』神名帳（九二七年）に掲載されている坂田郡の五つの神社に含まれていることから、相撲も地域の繁栄を願う神事として始まったと考えられ、現在でもその名残がのこっています。

日撫神社では、毎年秋祭りに顔戸・高溝・舟崎の氏子による奉納角力と角力踊りが執り行われていま

す。神事のあと土俵のお祓い、行司と呼び出しによる土俵祭がおこなわれます。奉納角力は、まず大関、関脇、小結の三役が神角力を奉納し、いずれも東西両方が勝つようになってくるのは、前述の豊穡占いと同様です。地元の豆力士たちが子ども角力を行い、中入りには、紫や赤、朱、草色の緞子・綸子織りの化粧まわしをつけた十八人の力士が社殿に参拝後、土俵入りをします。近年までは弘化年間（一八四四〜四七）に井伊家から奉納されたまわしが着けられていました。土俵入りのあと、一ツ拍子と三ツ拍子の角力甚句に合わせ、掛け声とともに土俵を踏みしめる角力踊りがはじまります。

後鳥羽上皇伝説

日撫神社には、東国と西国の力士が大きな石をはさんで力くらべをし、神の裁定で引き分けたという「手形力石」の物語が伝わります。また、「力競石」は、戦国時代に浅井家の武將で宇賀野出身とされる遠藤直経と、越前朝倉家随一の豪傑・真柄十郎左衛門が、この石を持ち上げて力を競いあったと伝えられています。これらは、日撫神社の神徳や奉納角力をたたえる伝承です。

山津照神社でも秋祭には神事角力が奉納されます。かつては、近郷はもちろん、遠く八日市、敦賀、岐阜あたりから力士が集まり、地方ではまれな盛況だったそうですが、近年



▲ 角力踊り（顔戸）

は、能登瀬の児童生徒と、氏子青年による奉納角力となっています。

さて、実はどちらの奉納角力もその始まりについて、鎌倉時代の承久二年（一二二〇）頃、北隣の名超寺（長浜市名越町）へひそかに行幸されていた後鳥羽上皇の参拝に際して、村人が力くらべの相撲を披露したことによると伝えられています。湖北地方を遊幸された上皇は、宇賀野の蓮成寺に参詣し、寺領として美濃国中山郷を寄せられました。また、日撫神社に参拝して角力を見学され、黄色の牛を奉納したと伝え、さらに山津照神社へも菊桐の紋章と、宝剣を納められたと伝えられています。次回、近江地域周辺にのこる後鳥羽上皇伝説を追ってみたいと思います。

（歴史文化財保護課）